



Title	「いちょう日本語プログラム」活動報告：外国人研究者および外国人配偶者向け有料日本語プログラム
Author(s)	義永, 未央子; 小関, 祐子; 鹿島, 実夢
Citation	多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2015, 19, p. 95-102
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/51628">https://doi.org/10.18910/51628</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 「いちよう日本語プログラム」活動報告

### ー 外国人研究者および外国人配偶者向け有料日本語プログラム ー

義永 美央子\*・小関 祐子\*\*・鹿島 実夢\*\*\*

#### 要 旨

本稿は、大阪大学国際教育交流センターが提供している外国人研究者、および、外国人研究者や留学生の配偶者向け有料日本語プログラム（いちよう日本語プログラム）に関する報告である。いちよう日本語プログラムは、外国人研究者・配偶者等を対象に、生活に必要な基礎的な日本語を学ぶ機会の提供や、居場所づくり・ネットワークづくりの促進を目的として開設され、約10年の歴史を有しているが、近年の状況を鑑み、2015年度からいったん休止とすることが決定された。このような現状をふまえて、本稿ではいちよう日本語プログラム設立の経緯、コースデザイン、プログラム運営の現状と課題について報告する。

【キーワード】 いちよう日本語プログラム、外国人研究者、外国人配偶者、有料日本語プログラム

#### 1 はじめに

本稿は、大阪大学国際教育交流センターが提供している外国人研究者、および、外国人研究者や留学生の配偶者向け有料日本語プログラム（以下、いちよう日本語プログラム）に関する報告である<sup>(1)</sup>。大阪大学の学内共同教育研究施設である国際教育交流センターは、大阪大学の各局に在籍する留学生を対象とした日本語プログラムの運営を一つの大きなミッションとしている。しかし留学生のカテゴリーに当てはまらない外国人研究者や外国人配偶者は、本センターが提供する留学生用日本語プログラムの恩恵を受けることができない。

外国人研究者の多くは、すでにその研究上の実績を認められて来日しているものの、必ずしも皆が日本語に堪能なわけではない。研究活動は英語で行える場合も多いが、研究室メンバーとのコミュニケーションや、買い物や食事などの日常生活ではどうしても日本語が必要な場面が生じてくる。また横田・白土（2004,

pp.186-187）は、留学生の配偶者が抱える問題として、①日本語ができない、②生活急変のために起こるフラストレーションがある、③孤独な状態に置かれる、④仕事を辞めて来日したため、仕事を離れた虚しさ、将来の不安を感じている、⑤子供の出産・育児の悩みも生じる、という5点を指摘している。横田・白土（2004, pp.181-182）も指摘するように、留学生を人間としてトータルに把握し、その様々な側面から生じてくる問題や悩みに対処するためには、家族の問題は留学生の生活の中で大きな位置を占める。配偶者や家族が日本で心地よく生活できることは、留学生の精神状態に安定をもたらす、ひいては研究活動を円滑に遂行する基盤ともなる。

そこで、これらの人々の日本語学習ニーズに対応し、また、特に配偶者の居場所づくり・ネットワークづくりをサポートする有料の基礎日本語学習支援プログラムとして、いちよう日本語プログラムが誕生した。いちようプログラムは、1年目である2004年度は大阪大学総長裁量経費を受けて無料で実施されたが、翌

\* 大阪大学国際教育交流センター准教授

\*\*大阪大学国際教育交流センター フロントスタッフ

\*\*\*大阪大学国際教育交流センター フロントスタッフ

2005年度より現行と同じ有料プログラムとなった(詳細は本稿2章参照)。

いちょう日本語プログラムは、母語・出身国/地域・身分・性別・年齢などが異なる受講者が相互にコミュニケーションしながら、日常生活に必要な日本語の学習をすすめられるようデザインされ、受講者からも好評を博してきた。日本の大学において、配偶者や研究者を対象とした有料の日本語プログラムを提供している例はほとんどなく<sup>(2)</sup>、本プログラムは先駆的な試みであったといえる。ただし、近年は受講者数の減少がみられ、2015年度よりいったん休止とした上で、今後の推移を慎重に見守りながら再開講の可能性を検討することとなっている。このような現状をふまえて、本稿ではいちょう日本語プログラム設立の経緯、コースデザイン、プログラム運営の現状と課題について報告する。

## 2 いちょう日本語プログラム設立の経緯

中曽根首相(当時)が提唱した「留学生10万人計画」(1983年)より20年を経た2003年、日本の受入留学生数は初めて10万人に達した(109,508人)。同じ年、大阪大学の受入留学生数も初めて1000人を超え、1,044人となった。国際教育交流センターの前身である留学生センターは、「本学の活発な留学生交流の拠点となり、留学生に対する体系的な日本語教育と、学業・生活面の諸問題に対する助言・指導を行うこと及び海外留学を希望する日本人学生に対する情報提供・指導を行うこと」(大阪大学留学生センター自己点検・評価報告書1994-2003, p.2)を目的としてさまざまな活動に従事してきた。

当時の留学生センターの一部門である日本語教育部門では、日本語研修コース、日本語・英語補講、国際交流科目日本語、全学共通教育日本語、日韓共同理工系学部留学生プログラム日本語、の各プログラムについて、カリキュラムの企画、実施体制の編成と維持、人員の配置とガイダンス、教務支援、プログラムの実施、カリキュラムの点検等、プログラムの運営・実施全般を行っていた(同上書, p.9)。2004年度には、

留学生数の急増を背景として、各日本語プログラムの限られたリソースを有効活用し、優先順位を設けた上で他の身分の留学生も履修可能とする日本語教育カリキュラム改革が実施された。それに伴い、2004年度までは定員に余裕があれば研究員や配偶者も日本語・英語補講を受講可能としていたが、新カリキュラムにおいては、学籍をもたない研究者や留学生等の配偶者は、これら留学生対象の日本語プログラムを受講することができなくなった。

日本語教育カリキュラム改革の基礎資料とすべく、2003年には全学の留学生、外国人研究者、留学生や外国人研究者の配偶者、教員、チューターを対象にアンケート調査(回答者総計740名)が実施された。このアンケートは、外国人研究者および、留学生や外国人研究者の配偶者に対しては、日本語学習のニーズ等に加えて、新たな日本語学習支援プログラムができた場合の費用負担についての意向を尋ねている。その結果、研究者が日本語を学習したい理由としては「生活に必要(44%)」「日本・日本文化・日本社会に関心がある(25.9%)」が上位を占め、「勉学/研究に必要」は22.2%に過ぎず、留学生とは順位が逆転している。一方、配偶者については「生活に必要(38.7%)」と「勉学/研究に必要(37.1%)」とが同程度であったが、これは主に留学生の配偶者で将来大学院を希望している者のうち「勉学/研究に必要」を挙げたものが62.5%と多かったことによる。配偶者の場合、将来設計によって日本語学習の目的と姿勢が大きく左右されることが窺える。また、「相応の授業料を払っても専門の日本語講師の教育を受けたい」と回答したものが外国人研究者の44.4%、配偶者の48.6%に達しており、高い日本語学習ニーズが明らかになった。

そのため、留学生だけでなく、外国人研究者や配偶者にも日本語学習の機会を提供することを目的として開始されたのが、いちょう日本語プログラムである。いちょう日本語プログラムは、その性質上日本語教育部門(当時)の教員を中心としたが、留学生交流指導部門(当時)の教員もワーキンググループに参画し、センターをあげての事業として企画・実施された。いちょう日本語プログラムの2005年度実施要領には、

このプログラムの目的が以下のように明記されている。

家族を伴って来学する外国人研究員および留学生が所定の研究目的を達成するためには、本人の研究能力および日本語能力の向上もさることながら、その家族がコミュニティに適應し、安定した生活を送ることが不可欠である。よりよい研究環境整備の基盤として、研究者本人およびこれらの家族に対して多様な日本語学習の機会を与え、外国人構成員に対する福祉を向上させることを目的としている。

2004年5月に開始されたいちょう日本語プログラムは、その年の大阪大学総長裁量経費を獲得したこともあり、受講者の費用負担なし（教材の実費は必要）、入門・初級・中級・中上級・漢字の5クラス体制を吹田・豊中両キャンパスで開講、特に入門レベルについては、週3回3週間（計9回）を1クールとして、ほぼ毎月受講開始が可能という、非常に充実した体制で実施された。しかし、総長裁量経費は単年度予算のため、いちょう日本語プログラムは早晩自立採算化を求められることとなった。また、当初の緻密なコース設定は、多大な運営上の負担を生じさせ、コースのあ

り方をより合理的に検討しなおす必要性も生じてきた。これらを踏まえ、2005年度のいちょう日本語プログラムは、入門・初級・中級の各クラスは週2回12週間、漢字クラスは週1回12週間という体制に整理され、かつ、入門・初級・中級クラスは5,000円、漢字クラスは2,500円の受講料を徴収することとなった。しかし、この受講料では講師謝金をすべて賄うことができず、「大阪大学において実施する公開講座の講習料」（大阪大学謝金規則）を前提としつつ、2007年度からは週2回12週、計24回の受講料として10,000円を徴収する形がとられた<sup>9)</sup>。またクラス数についても2006年度から入門・初級の2クラスとなった。これらの体制は、以後2014年度まで維持されている。

2005年度からの受講者数の推移は図1の通りである。2005年度の受講者数が突出して多いのは、上述のようにこの年度のみ3レベル体制で実施されていたことによる。また表1に2005年度秋学期から2014年度秋学期までにいちょう日本語プログラムを受講した外国人研究者（教員を含む）の所属部局別人数を示す。のべ75名が受講した工学部／工学研究科を筆頭に、27部局の257名が受講している。

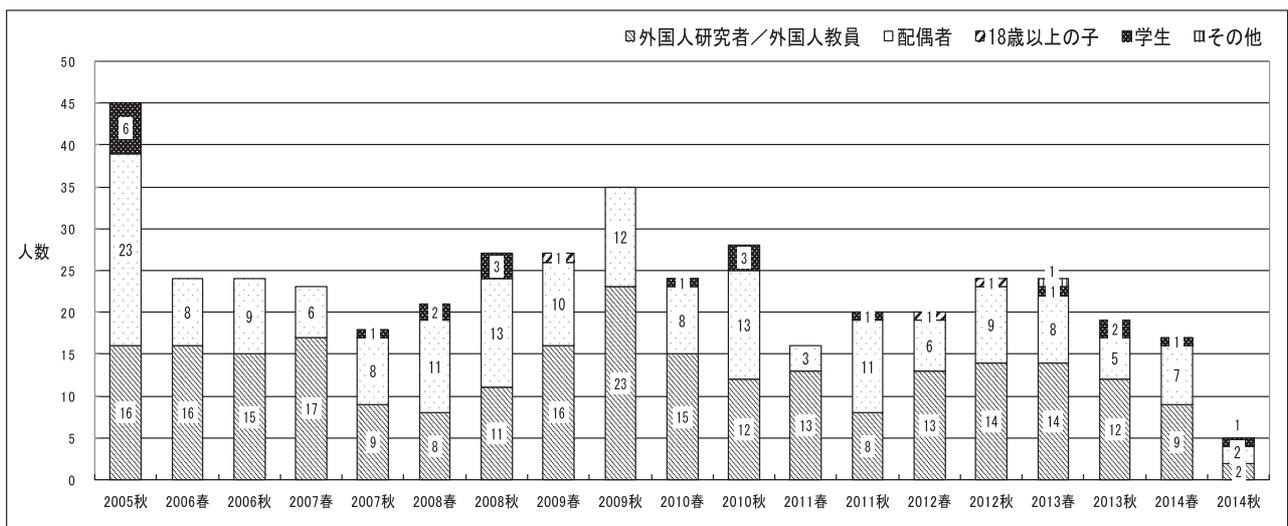


図1 いちょう日本語プログラム受講者数の推移（身分別内訳）

表 1 外国人研究者および教員の所属部局別人数  
(2005 年度 秋学期から 2014 年度秋学期の累計)

所属部局	人数
工学部／工学研究科	75
医学系研究科	25
産業科学研究所	21
接合科学研究所	17
レーザーエネルギー学研究センター	16
免疫学フロンティア研究センター	15
蛋白質研究所	10
微生物病研究所	10
生命機能研究科	10
情報科学研究科	9
基礎工学研究科	7
理学研究科	6
人間科学研究科	6
核物理研究センター	5
社会経済学研究所	3
文学研究科	3
世界言語研究センター	3
薬学研究科	3
臨床医工学融合研究教育センター	2
高等司法研究科	2
先端科学イノベーションセンター	2
法学研究科	2
極限量子科学研究センター	1
国際公共政策研究科	1
コミュニケーションデザインセンター	1
フォトニクスセンター	1
超高圧電子顕微鏡センター	1
合計	257

### 3 コースデザイン

2章で述べたような経緯を経て開始されたいちよう日本語プログラムは、現在は年2回（春学期は5月から7月、秋学期は11月から翌年2月）、日本語未習者用のAクラスと、50時間程度の学習経験がある人のためのBクラス（具体的には、ひらがな・カタカナの読み書きができ、簡単なあいさつややりとりができる程度）の2クラスが開講されている。各学期とも、1週間に2回（水曜・木曜、2時40分から4時10分）の授業を12週間、計24回提供している。いずれのクラスにおいても、場面・機能を中心としたシラバス編成で、生活に必要な日本語を楽しく学ぶことに主眼を置いている。12週間の具体的な流れは、おおむね次頁の表2、表3のようになる。Aクラスの場合、買い物やレストランでの会話、道の尋ね方のような、日常生活に必要なコミュニケーションの他、自分の趣味や日常生活、あるいはそれらに対する印象や感想について、ごく基本的な語彙と文型を用いて話せるようになることを目指している。

BクラスでもAクラスと同じような生活場面が中心となるが、ロールプレイなど、参加者間のインタラクションを重視した活動を取り入れながら、より幅広い場面で詳細にコミュニケーションができるようになることを目指している。そして、いずれのクラスでも24回中17回以上の授業に出席した者には終了証を授与している。

いちよう日本語プログラムのコーディネーションは、国際教育交流センターの専任教員が担当しているが、実際の授業担当は、大阪大学大学院の各研究科で日本語教育を専攻し、かつ、日本語教育の経験を有する大学院生に依頼している。配偶者等と比較的年齢に近い大学院生が担当することによって、親しみのあるリラックスした教室の雰囲気が醸成されている。また、いちよう日本語プログラムでは、市販教材は使用しておらず、代々の担当者が作成したオリジナル教材に改変を加えつつ使用している。大学院生にとって、教材開発や実際の授業の実施は、日本語教育の現場を経験する貴重な機会となっている。

表2 12週間の流れ (Aクラス・2014年度春学期)

Learning Schedule		2014 Spring		
Week	Class	Unit No.	Topics	Vocabulary, Grammar
1st	1	1	About the Japanese Language Self-Introduction Greetings	Introduction and Overview A Small Lecture on the Japanese Language Greetings & Self-Introduction
	2			
2nd	3	2	Shopping (1)	Numbers, How much-?
	4			
3rd	5	3	Shopping (2)	Time/From- to, Do you have-?
	6			
4th	7	4	Family	Family Members Possessives
	8			
5th	9	5	Restaurant	Foods, Do you have-?
	10			
6th	11	6	Preference	Verbs (1), I like-.
	12			
7th	13	7	Daily Schedule	Verbs(2), I usually do-.
	14			
8th	15	8	Experiences	Past-forms, I went to-.
	16			
9th	17	9	Transportation	How do I get-?
	18			
10th	19	10	Impression (1)	Adjectives (1), How do you like-?
	20			
11th	21	11	Impression (2)	Adjectives (2), and/but
	22			
12th	23	12	Impression (3)	Adjectives (3), It was-.
	24			

表3 12週間の流れ (Bクラス・2014年度春学期)

Learning Schedule		2014 Spring		
Week	Class	Unit No.	Topics	Vocabulary, Grammar
1st	1	1	Self introduction Daily activities and customs	Useful expressions Countries, Family members, Jobs, etc. ～は～です ～時に～ます/ました
	2			
2nd	3	2	Shopping	イ Adjectives & ナ Adjectives Asking for places: ～は～にあります describing things: ～より～ほうが～
	4			
3rd	5	3	Making a call	Making an invitation: ～ませんか/～ましょう Time/ Weekdays Making a reservation
	6			
4th	7	4	Review etc.	Review Role playing Adjustment
	8			
5th	9	5	In the restaurant	Making an order Talking about food and drinks
	10			
6th	11	6	In the library	Making requests: V. + たい て-form: ～てください
	12			
7th	13	7	Transportation	て-form3: Vてください (Asking and Giving directions)
	14			
8th	15	8	Review etc.	Review Role playing Adjustment
	16			
9th	17	9	Daily activities	て-form1: ています (Describing ongoing action) て-form2: ています (Describing state in effect)
	18			
10th	19	10	In the hospital	て-form4: てもいい てはいけません
	20			
11th	21	11	In the hospital	ない-form 1: ないてください ないほうがいい
	22			
12th	23	12	Review etc.	Review Role playing Adjustment
	24			

#### 4 プログラム運営の現状と課題

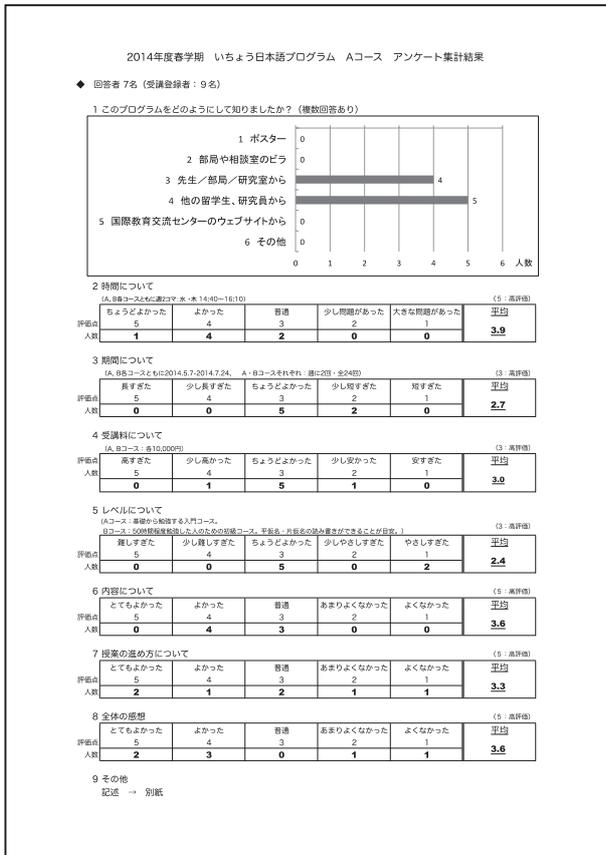
いちようプログラムの授業内容は、従来受講者より高い評価をうけてきた。少し長くなるが一例として、2009年度秋学期 A クラスの受講者によるエッセイ(感想)の一部を紹介する。

The course that I took enabled me to understand basic Japanese grammar, and to also recognize the art of writing hiragana and katakana. It's a valuable skill to get to learn a new language with an unfamiliar script. Language learning needs practice, both in speaking and writing, plus time for both preparation and consolidation. It is therefore not easy for an adult who has other work commitments, or studies to learn a new language. I was impressed by the ICHO JLP (Japanese Language Program: 筆者注) course from the beginning, and no matter how busy I was at

work, I followed the course to the end. The content of the course covers basic expressions, pronunciation, and the construction of simple sentences. The methodology enables each student to practice the language, and to interact with other students in the class. I can honestly say that I have benefited from the course. I have acquired some basic linguistic patterns and concepts, and I do not feel that the Japanese language is so different or difficult anymore! As time passes, I can also say that I have become more familiar with the environment, and more accustomed to the people, and the language. Taking the ICHO JLP course is a good place from which to start.

研究活動で多忙を極める研究者の場合、日本語学習の意欲はあっても、実際に週に2回教室に足を運んで学習を続けることには困難が伴うであろう。配偶者

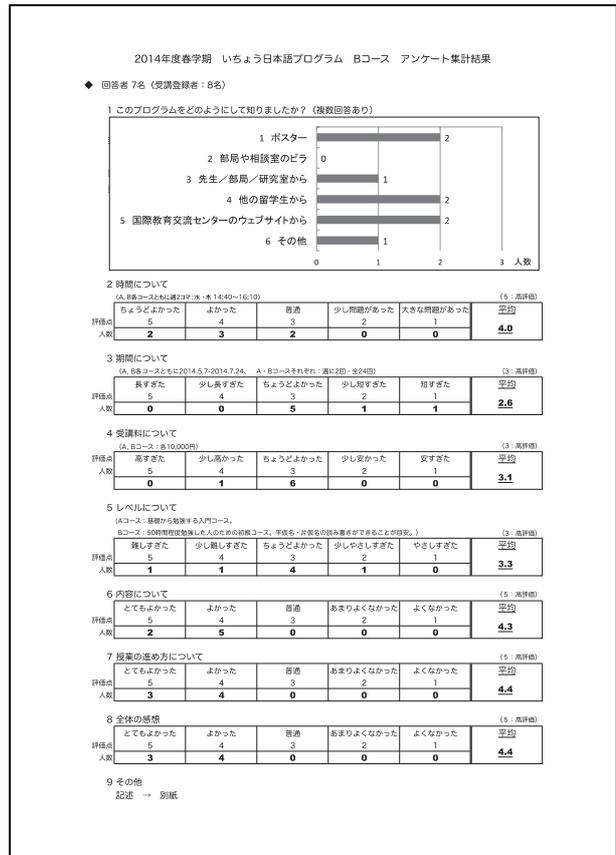
資料1 学期末アンケートの結果  
(Aクラス・2014年度春学期)



の場合も、母国とは異なる環境の中で、家事や育児と両立させながら言語学習への動機づけを維持するには努力が必要である。しかしこのエッセイを書いた受講者のように、時間をやりくりしながらクラスへの参加を続け、いちよう日本語プログラムを日本語学習や日本の生活のスタートとして評価してくれる人も少なくない。

2014年度春学期の受講者からも、「I liked to have lots of printed courses.」「Emphasis and daily conversation was nice.」「Very serious and friendly teachers!」「Thanks for everything and your hard work!」といった肯定的なコメント(アンケートの自由記述欄における回答)が複数寄せられ、おおむね好評であった(資料1・2)。ただし、資料1からもわかるように、特にAクラスにおいて、いくつかの項目の評価は若干低めになった。これはこのクラスの内容を「やさしすぎる」と感じた受講者が9

資料2 学期末アンケートの結果  
(Bクラス・2014年度春学期)



名中2名いたためであろう(資料1 アンケート設問5「レベルについて」参照)。現在、いちよう日本語プログラムは2クラス開講のため、どうしてもクラス内に若干のレベル差が生じてしまう。Aクラスは未習者対象のクラスであるが、若干の学習経験はあるものの、Bクラスは難しすぎると感じる受講生がAクラスに配置されることで、このような感想がでたものと推測される。他方、いちよう日本語プログラムの内容を高く評価する受講者からは、「It would be nice to have an ICHO course group C.」のように、クラスの増設を望む声も毎学期寄せられている。しかし、有料プログラムの性質上、クラスを増やしても受講生が少なかった場合は、赤字となりセンターの予算から補填が必要になる。それらを勘案し、なかなかクラスの増設には踏み込めない現状があった。

また、2章の図1に示したように、受講者数が2013年頃から減少しはじめ、2014年秋学期には受

講希望者数が5名となった。この5名は偶然全員がBクラスの受講を希望していたため、2014年秋学期はAクラスを不開講とし、Bクラスのみを開講した。もちろん、いちょう日本語プログラムの運営にかかる諸問題（平日の日中に開講されるため、研究者は時間がとりにくい、豊中・箕面キャンパス周辺に居住する場合は移動時間の負担が大きい、有料のため経済的な負担が大きい等）の存在は否めないが、種々精査したところ、近年大学の内外でいちょう日本語プログラムと同様の目的を有するプログラム・活動が複数開始されていることも、受講者減少の一因になっているのではないかと推察された<sup>4)</sup>。

例えば、工学部・工学研究科の「サバイバルジャパニーズコース」（同部局に所属する留学生、研究生、研究員対象、全10回）<sup>5)</sup>や免疫学フロンティア研究センターの日本語クラス（同部局に所属する留学生、研究生、研究員対象、入門と中級の2クラス、6ヶ月週1回）のように、各部局の留学生、研究生、研究者を対象に実施されているクラスその他、「たけのこ日本語テーブル」（吹田キャンパス、家族を含む阪大関係者全て対象、週1回）、「まちかね日本語テーブル」（豊中キャンパス、家族を含む阪大関係者全て対象、週1回）など、ボランティアベースの日本語交流活動も各キャンパスで実施されている。これらの日本語教室やボランティアベースの交流活動は全て無料であり、吹田キャンパスだけでなく豊中キャンパスでも実施されているため、日本語学習のニーズがある外国人研究員や配偶者等は、経済的・時間的な負担なく日本語学習の機会を得ることができるようになったといえる。また、2013年には箕面市小野原西に箕面市立多文化交流センターがオープンし、日本語教室やさまざまな国際交流活動を企画・実施している<sup>6)</sup>。

翻って国際教育交流センターの現状をみると、いちょう日本語プログラム開始時に1,000名強であった大阪大学の受入留学生数は今や2,000名を越えており（2014年5月1日現在で2,012名）、センターの業務は留学生に対する各種日本語プログラムの提供の他、留学生受け入れ支援、海外留学派遣支援、地域・社会貢献、新規来日者への情報提供・ビザ取得手続きサポー

トや宿舍手配の支援（サポートオフィス）等、ますます多岐にわたっている（大阪大学国際教育交流センター2013年度年報, p.21）。これらの状況を鑑み、今後の外国人研究員や配偶者の日本語学習支援は各部局やボランティアベースの活動に委ね、いちょう日本語プログラムは2014年度をもっていったん休止とすることが、2015年1月開催の国際教育交流センター教授会にて決定された。ただし、「たけのこ日本語テーブル」「まちかね日本語テーブル」については、これまでも国際教育交流センター専任教員がボランティアメンバーに対する助言等を実施しており、今後もこのような後方支援的な活動を継続し、外国人研究者・配偶者等の日本語学習や生活支援に引き続き携わっていくこととなる。

## 5 おわりに

本稿では、国際教育交流センターが提供してきた外国人研究者および外国人配偶者向け有料日本語プログラムである、いちょう日本語プログラムの活動報告を行った。約10年にわたり、同プログラムの企画・運営・実施に尽力してきた国際教育交流センター教職員、授業を担当してくれた大学院生等の努力を考えると、今年度をもって休止というのは苦渋の決断でもあった。しかし、本センター以外にも、日本語学習ニーズを有する外国人への支援の輪が広がっていることは、喜ばしいことでもあろう。今後も留学生のみならず、大阪大学を構成する外国人一人一人が日本での生活や研究を円滑に行えるよう、関係者が協調・連携していくことが求められる。

## 謝辞

この報告をまとめるにあたり、前いちょう日本語プログラムコーディネーターである三牧陽子先生（大阪大学名誉教授）には、設立当初の経緯等、様々な貴重な情報やご助言を頂きました。また、いちょう日本語プログラムワーキングメンバーの西口光一先生、有川友子先生、近藤佐知彦先生にもご支援を頂きました。そして、2014年度の授業担当者である文学研究科博

士後期課程の麻子軒さん、欧麗賢さん、言語文化研究科博士後期課程の笹川恵美子さんをはじめ、代々の授業担当者の皆様には、さまざまな工夫のもとに、充実した授業を行って頂きました。最後に、いちょう日本語プログラムは受講生の皆様のご理解やご協力あってこそその取り組みでした。この場を借りて、関係の皆様には厚くお礼申し上げます。

## 注

1. 「配偶者」には、法的に認められた配偶者だけでなく婚約者やパートナーも含まれる。また 2009 年度より、18 歳以上の子も受講可能になった。
2. いちょう日本語プログラムと最もよく似た形態の取り組みとして、名古屋大学の「留学生の家族のための日本語・日本事情コース」がある。これは、名古屋栄ライオンズクラブの後援を得て、名古屋大学留学生会 (NUFSA) が主催している。週 2 回、半年で 11,000 円の受講料を徴収するが、教科書は名古屋栄ライオンズクラブからのプレゼント、ボランティアによるベビーシッターサービスも提供されている (<http://www.isa.provost.nagoya-u.ac.jp/doc/Japanese%20Course%202014%20autumn.pdf> : 2015 年 2 月 13 日最終確認)。また、神戸大学ではココロネットという留学生・外国人研究者とその家族のサポート組織が無料の日本語日本事情講座を提供している (<http://www.geocities.jp/kokoronetinkoube/nihongo/07nihongo.html> : 2015 年 2 月 13 日最終確認)。ただし、これらの取り組みは、留学生センターではなく留学生会やボランティア組織が主体となって運営されている点で、いちょう日本語プログラムとは性格を異にする。このほか、京都大学国際交流センターはティーチング・アシスタントによる日本語クラスを提供しており、留学生だけでなく外国人研究者・配偶者も受け入れている (<http://www.ryugaku.kyoto-u.ac.jp/japanese/support/> : 2015 年 2 月 13 日最終確認)。

3. 2013 年度までは、日本学術振興会 (JSPS) には JSPS が認める研究員の日本語研修にかかる費用を負担する制度 (日本語研修) があった。これを利用した場合は、JSPS がいちょう日本語プログラムの受講料を支払うことになり、受講生本人には費用負担が発生しない。
4. いま一つ、大阪大学に来る外国人研究者数の減少が影響している可能性もある。大阪大学が毎年発行しているプロスペクトス (Osaka University Prospectus) によると、2010 年度には 3,119 人であった外国人研究者数 (number of international researchers) が 2011 年度に 787 人、2012 年度には 777 人に激減している。2013 年度には 860 人とやや増加の兆しはあるものの、以前の水準には回復していない。同資料には人数しか記載がなく詳細は不明であるが、おそらく 2011 年 3 月に発生した東日本大震災の影響があるのではないかと推察される。
5. 詳細は大阪大学工学部・工学研究科国際交流センターの HP (<http://www.faso.eng.osaka-u.ac.jp/Japanes-e/> : 2015 年 2 月 13 日最終確認) を参照のこと。
6. 詳細は公益財団法人箕面市国際交流協会 (MAFGA) の HP ([http://mafga.or.jp/ability/individual/ab\\_ja/](http://mafga.or.jp/ability/individual/ab_ja/) : 2015 年 2 月 13 日最終確認) を参照のこと。

## 参考文献

- 大阪大学国際教育交流センター (2014) 『2013 年度年報』
- 大阪大学留学生センター (2003) 『大阪大学における日本語教育カリキュラム改革に関する全学アンケート調査報告書』
- 大阪大学留学生センター (2004) 『自己点検・評価報告書 1994-2003』
- 横田雅弘・白土悟 (2004) 『留学生アドバイザー—学習・生活・心理をいかに支援するか—』ナカニシヤ出版